

次郎「あんにするのはあづきといふ豆で、こなにするのには大豆といふ豆です。」
父は三郎のあたまでなでながら、「三郎はこんやは大そうもの知りになつたね。」
と いひました。

十一
ワラ

三郎「豆です。」
次郎「だんごにつけるこなは。」
三郎「あれも豆です。」
次郎「それではあんの豆とだんごにつけるこなの豆と同じですか、ちがひますか。」
三郎「それは知りません。」

皆

イネノ ワラ デハ、タワラ コモ ムシ
 ロナハ ワラヂ ミノ ナド ヲ 作りマス。
 又 タタミノ トコ ニ シタリ、ヤネ ヲ
 フイタリ シマス。ツノ ホカ ツカヒミチ
 ハ マダ イクラ モ アリマス。皆サン ノ
 知ツテ キル ダケ イツテ ゴラン ナサ
 イ。
 麥ワラ デハ ヤネ ヲ フキマス ガ、又

物

赤 ヤ 青 ヤ キ色 ニ ソメテ、麥ワラザ
 イク ニモ ツカヒマス。麥ワラザイク ニハ
 カゴ ヤ オモチヤ ヤ 色色ナ 物 ガ ア
 リマス。

マダ コノ ホカ ニ 麥ワラ デ 作ツタ 物
 デ、アツイ ジブン ニ ツカフ 物 ガ ア
 リマス。皆サン 何 デセウ。

十二 サザエ ノ ジマン

明治四十三年四月十五日 翻刻印刷
明治四十三年四月廿八日 翻刻發行

著作權所有

明治三十四年四月三日
文部省檢査濟

發行者 兼
文部省

發行者 兼
日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門十七番地

印刷者
代表者 大橋新太郎
東京市小石川區金町百八番地
敬利世

印刷所
博文館印刷所
東京市小石川區金町百八番地

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社
國定教科書共同販賣所

定價金八錢

尋常小學讀本卷四

第一 あまのいはと
天照大神の御第に、すさのをのみことといふきのあらに神さまがありました。ある時生馬のかはをはいで、大神がはたをおらせていらつしやる所へおなげ入れになりました。した。大神はおどろいて、あまの岩戸の戸をたてて、その中へおかくれになりました。さあ大へん、今まであかるかつたせかいが

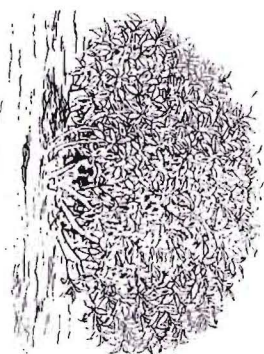
あくる

5 卷

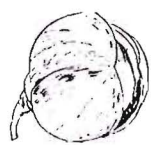
第一	あまのいはと	一
第二	春が来た	四
第三	神武天皇	五
第四	水のたぎ (一)	八
第五	水のたぎ (二)	十一
第六	ナラノ大グツ	十三
第七	コヒ	十五
第八	母の手つたひ	十八
第九	かまぬすがと	二十二
第十	うめぼし	二十七
第十一	茶	三十
第十二	蝶	三十三
第十三	小子供 こどもこ のすがる	三十六
第十四	ていしおば	三十八
第十五	汽車ノタビ	四十一
第十六	かみなり	四十五
第十七	瓜	四十九
第十八	カウモリ	五十二
第十九	炭ノ油	五十六
第二十	蟲のこゑ	六十
第二十一	はがき	六十三
第二十二	マツリ	六十七
第二十三	鹿ノ水カギ	七十
第二十四	ひよどりごえのさめおとし (一)	七十四
第二十五	ひよどりごえのさめおとし (二)	七十七

第十一 茶

コ、ニ茶ノ木ガアリマス。ハガヨクシゲツ
 テ下ノ方ハ枝モ見エマセシマルクカリコ
 シダニハ木ノヤウニ見エマ
 ス。茶ノ木ノ高サハ大テイ三
 四尺グラキニアタ、カイト
 コロニヨクソダツ木デス。
 コレハ茶ノ葉デスヨクソダツ茶ノ葉ハ



色デス。
 長サガ二寸バカリモアリマス。
 ツヤガアツテ、色ハコイミドリ
 十一月ゴロ白い色ノ花ガサキマス。花ニハ
 ベンガ五ツアツテ、ヨイニホヒガ
 シマス。ソノ實ハジバキノ實ノヤ
 ウニカクテ、ソノ中ニマルイ種
 ガニジニジツアリマス。

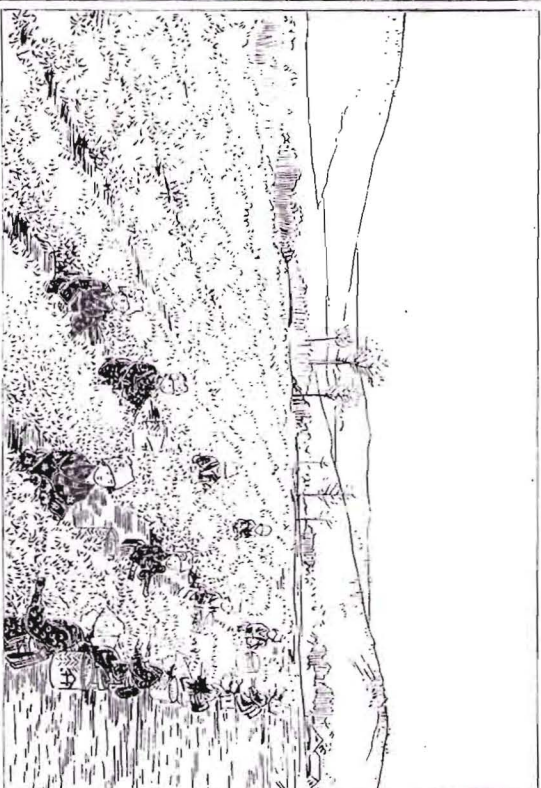


第十二 蝶

葉デコシラヘル茶ガニ番ヨイ茶ニナリ
ス。ソレカラ十四五日タツテツムノヲニ番
茶トイヒマス。マタ三番茶・四番茶マデモ
ムコトガアリマスガ、ソナニツムト、茶ノ
木ノタメニハヨクナイサウデス。
サクラノ花ノ下ニトシテキル白イ蝶ヲ見
ルト、花ガチツタノカト思ヒ、ナノ畠ニアソ

キマス。
茶ハシシメノ出ルジ
ンニ、ソノデタテノ葉ヲ
ツムデス。五月ゴロカ
ラジミハジメマスガ、一
バンハジメニツムノヲ
一番茶トイヒマス。ソノ

コ、ハ茶畠デス。大ゼイノ女ガ茶ヲツンデ



平

西瓜

瓜

僕

といひました。

「僕は死んでしまつたのだらう。」

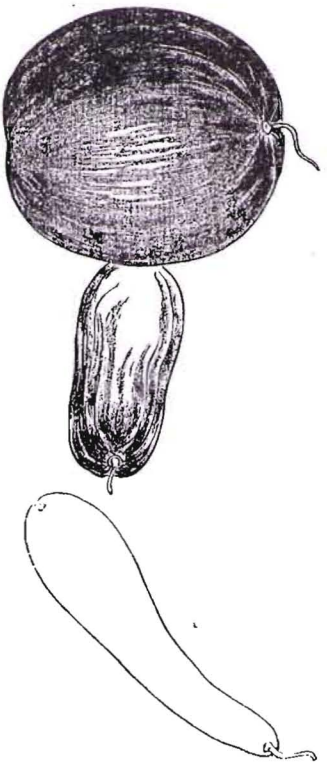
第十七 瓜

キ瓜・マクハ瓜・白瓜・夕顔・西瓜・トウ瓜・カボチ
ヤ・ヘチ・マナドヲ瓜・トイフ。マジ形カライへ
バ、キ瓜・白瓜・ヘチ・マ細長ク、トウ瓜ハ太ク、
カボチヤハ平タイ。マクハ瓜ヤ夕顔ヤ西瓜
ニハ、マルイ形ノモ、長イ形ノモアル。キ瓜ニ

顔

らむやうないながかりがして、耳がさける
やうなおそろしいかみなりが鳴りました。
二人は思はず耳に手をあてて、そこにたふ
れました。しばらくたつて、顔を上げて、その
あたりを見まはすと、かみなりがおちて、そ
の高い水がまづ二つにさけてゐました。
音次郎は友吉のかたに手をかけて、
「あゝ、あぶなかつた。もし君が居なかつた

西瓜ハ中ヲタベテ外ヲノコシ、
 ソノ他ノ瓜ハ外ヲタベテ中ヲ
 ノコス。ナマデソノマ、タベル
 ノハ、マクハ瓜ト西瓜テ、二ナケ
 レバタベラレナイノハ、カボチ
 ヤトトウ瓜トタ類デアル。キ瓜
 ヤ白瓜ハ生テ瓜モニシテモ、
 ジケ物ニシテモタベ、又ニテモ



ハカハニ小サイトゲガアリ、カ
 ボチヤニハデコボコガアル。ソ
 ノ他ノ瓜ハ大テイナメラカデ
 アル。
 カボチヤハ中ガ黄色テ、西瓜ハ
 中ガ赤イ。西瓜ノ種ハ大テイ黒
 イガ、ソノ他ノ瓜ノハ白イノガ
 多イ。

シタ時、カウモリハ、
「私ハ鳥デモ、ケモノデモナイカラ。」
トイジテ、ドチラヘモ、ジキマセシデシタ。ソ
ノ中ニケモノガ勝チサウニナジタノヲ見
テ、ニハカニ、
「私ハカラダガネズミニニテキルカラ、ケ
モノノ仲間ダ。」
トイジテ、ケモノノミカタニ、ナリマシタ。

タベル。ヘチャマハワカイウチハタベラレル
ガ、實ガイルトタベラレナイ。
瓜ノ葉ハ廣クテ、ドゲノハエテキルノガア
ル。花ハタ顏ダケガ白クテ、ソノ他ハ皆黃色
デアル。
瓜ノツルニハナスビハナラヌ。
第十八 カウモリ
昔鳥ノ仲間トケモノノ仲間ガケンクワヲ

ちやぶられた。

をけり

明治四十三年一月廿一日 翻刻印刷
明治四十三年二月十五日 翻刻發行

著作權所有

發行者 兼 發行 者
發行者 兼 發行 者
日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

代表者 大橋新太郎
愛敬 利 世
東京市小石川區久堅町百。八番地

印刷者 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百。八番地

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

明治四十二年三月一日
文部省檢査濟

定價金八錢

尋常小學讀本卷五

砂 海岸

第一 日本

わが日本は島國である。四方は海にとりま
かれてゐる。海岸には切立てたやうな岩山
もあるが、平たい砂原になつてゐる所が多
い。一面に小松のはえた小松原もあり、又大
きな松がならんだ長い松原もある。海べは
ふだん強い風がふくから、高い松はしぜん
におもしろい枝ふりになつてゐる。白い砂

尋六 尋大

おもしろ

巻6

第一 日本	一	第十四 豊臣秀吉	四十三
第二 四季	六	第十五 豊臣秀吉	四十八
第三 遠足	七	第十六 塩と砂糖	五十三
第四 ガン	十二	第十七 上杉謙信	五十五
第五 取入れ	十四	第十八 人のなきけ	五十九
第六 物サシトヤストハカリ	十七	第十九 熊	六十四
第七 かしこい子ども	二十	第二十 村水	六十七
第八 ヤクソクテジビシ	二十四	第二十一 古机	六十九
第九 よびてうち	二十九	第二十二 むね上げ	七十四
第十 織物	三十三	第二十三 港	七十七
第十一 太郎の日記	三十五	第二十四 大阪	八十
第十二 京都からの手紙	三十九	第二十五 かぞへ歌	八十二
第十三 コトワザ	四十一		

けてない金は一厘でも取つてはならな
い。
「それでもだんなが居ないから、だまつて
ゐれば誰にも知れはしない。」
「だんながおるすだから、なほさらまちが
ひがあつてはならない。」
といつても、長松はまだ笑つてゐた。
あとになつて、主人はこの事を聞いて、直吉

第十 織物

は正直ものだとはめて、長松にはひまをや
つた。

織物ニハキヌ織物・モメシ織物・アサ織物・毛
織物ナドイロくアリ。絹糸ニテ織リタル
モノヲ絹織物トイフ。着物・羽織・ハカマ・オビ
ナドノアタヒ高キモノハ大テイコノ絹織
物ニテヅクル。

木綿糸ニテ織リタ

ルモノヲ木綿織物

トイフ。コレヲ着

物ハ多クコノ木綿

織物ニテジクル。

麻又ハカラムシノ糸ニテ織リタルモノヲ
麻織物トイフ。麻糸ニテ織リタルモノハカ
ヤナドニジクリ、カラムシノ糸ニテ織リタ



ワタ

ルモノハカタビ

ラナドニジクル。

フラインネル・ラシ

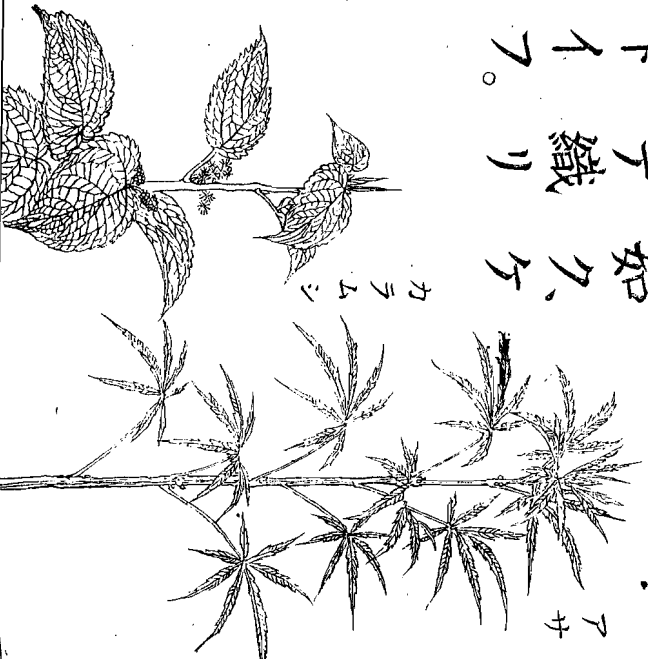
ヤ・メリンスナドノ如ク、

モノノ毛ヲジムギテ織リ

タルモノヲ毛織物トイフ。

第十一 太郎の日記

十二月十日 日曜 晴 今日天気がよ



カラムシ

守りてつゝ世家のため、國のため。

終

大正四年二月廿五日修正印刷
大正四年二月廿七日修正發行
大正四年三月一日翻刻印刷
大正四年三月十日翻刻發行

著作權所有

著者兼
發行者

文

部

省

日本書籍株式會社
東京市小石川區久堅町百〇八番地。

翻刻發行
兼印刷者

代表者

大倉保五郎

印刷所

日本書籍株式會社工場
東京市小石川區久堅町百〇八番地

大正四年三月三日
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

楠木正行ハ正成ノ子ニシテ、父ニオトラヌ忠義ノ士ナリ。正成ノ戦死セシハ正行ガ十一歳ノ時ニシテ、ソノ折父トトモニ戦場ニ出デシトセシガ、正成ハ道ニラサトスヤウ、
「我聞ク、シ、ハ子ヲ生メバ、三日ニシテコレ谷ソコヘオトシテ、ソノカヲタメストイフ。ナシデハ年スデニ十歳ヲコエタリ。ヨク父ノ言フコトヲ聞分ケヨ。コノ度ノ戦敵ハ、

第一 楠木正行

(一)

尋七 尋七

もろろ

巻1

第一	楠木正行 (一)	一
第二	楠木正行 (二)	五
第三	ぬなかの四季	九
第四	商業問答	十二
第五	問合の手紙	十五
第六	豆の一族	十九
第七	堀保巳	二十二
第八	手ノハタラキ	二十五
第九	蠶	二十八
第十	やき物とぬり物	三十四
第十一	勧工場	三十六
第十二	山内一豊の妻	三十九
第十三	家の紋	四十四
第十四	西洋紙上日本紙	四十六
第十五	郵便の話	五十
第十六	東京見物 (一)	五十四
第十七	東京見物 (二)	五十七
第十八	犬	五十九
第十九	水とからだ	六十三
第二十	桃をぶく手紙	六十六
第二十一	海ノ生物 (一)	六十九
第二十二	海ノ生物 (二)	七十四
第二十三	何事も精神	七十八
第二十四	航海の話 (一)	八十一
第二十五	航海の話 (二)	八十四
第二十六	廣瀬中佐	八十九

といふ。藤は

の外からこゑをかけて、
「とくに申し上げようと思つてゐました。あ
なたと私は親類ださうでございますから、
どうかこれからお心安く願ひます。」

にはの藤の花が咲いて、風が吹く度にむらさ
きのふさが動いてゐる。畠のゑんどうがまき

第六 豆の一族

高橋忠一様

す。

い實のなるやうなのをお願ひ
申します。又母がかねづめづ
らしい草花をほしくと申
して居りますから、おてかずで
も、これも二三種買つて来てい
たいきたうございます。花の種
類は何でもよろしうございま

五月四日

鈴木愛吉

「私はちつとも存じ
ませんでしたが
いふわけで、おたが
ひに親類の間から
でございますか。」

と問へば、ゑんどうのいふに
「あなたと私は大そう似てゐ

るではありませんか。第一あなたにも私に
も豆がなります。葉は羽形で、二枚づつ向ひ



合つてゐますし、花は同じく蝶の形をして
ゐます。大豆、小豆、さゞげ、そら豆、なた豆など
はすべて私どもの親類です。豆類にはつる
になるのとならぬのがあります。
藤「さうでございますか、はじめ承りました。
私はこんな大きななりをしてゐますが、畠
の藤豆さんとはちがつて、私の豆はたゞら
れません。まことにおはづかしに次第です。
ゑんどう」あなたはそのお美しい花だけでたくさ



物ヲ讀マセ、コレヲ聞キテ、一心ニ勉強セシカ
バ、後ニハ名高キ學者トナリ、多クノ書物ヲア
ラハセリ。保己一ノ家ハ今
ノ東京、ソノコロノ江戸ノ
番町ニアリ、多クノデシ保
己一ニツキテ學ビシカバ
時ノ人
番町デ目アキ目クナニ
物ヲキ。

んでございます。あなたほどの大きな花ぶ
さは見たことがございません。私どもの親
類で、小さくてかはいらしいのは、あの春の
野に咲くれんげ草でございませう。」
第七 塙保己一
目ハ見ユレドモ、字ノ讀メザル人ヲアキメク
ラトイフ。シカルニ目ハ見エバシテ、大學者ト
ナリシ人アリ、塙保己一コレナリ。
保己一ハ九歳ノ時メクラトナリシガ、人ニ書

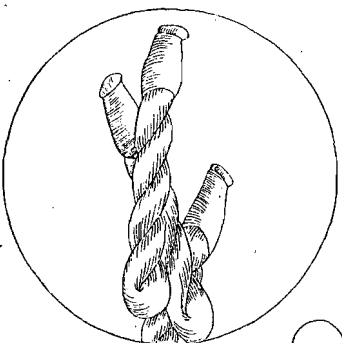
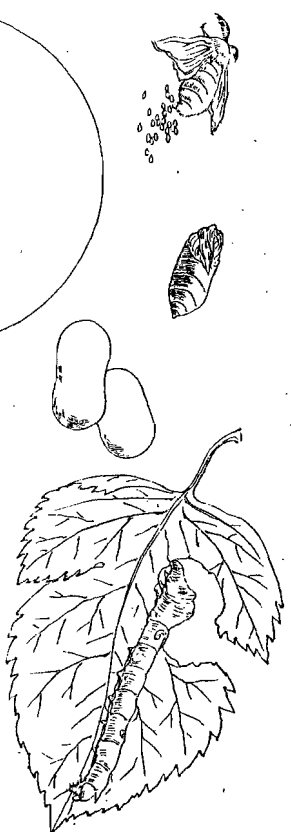
サルニハ手ノハタラキヲスルモノガ四本アリマス。シカシ人ノヤウニ色々ナ物ヲコシラヘルコトハ出来マセシコレハチエガ少イカラデス。手バカリ動カシテモ、チエガナケレバ何ノ役ニモ立チマセシ。

第九 蠶

一匹の蠶の口から出る絲をのばして見ると、五六町もあるといふことである。この長に絲を出す蟲が百匹もなれば、本綿は、一尺の

繭織物を織る。繭絲は出来な。蠶をかつて繭絲を取り、繭絲を織つて繭織物にするまでに、は大そうな手間がかかる。それを考へると、繭織物のあたひの高いのも、けつしてむりではな。い。

卵からかへつたばかりの蠶は、あり程の大きさて、長さは一分ばかりしかない。けれども一月ばかりの内に、皆さんの小指程の大きになり、色もはじめは黒いが、だんくかはつ



て青白くなる。
 かへりたてからしきりに食物
 をさがしてゐて、桑の葉をやる
 と、すぐ食ひはじめ。小さい時
 分はやはりらかな葉をこ
 まかく切つてやるが大
 きくなると、枝のまゝや
 る。食つてしまふと、頭を
 うごかして、しきりに桑

の葉をたづねる。大きな蠶がたくさんで桑の
 葉を食ふ時には、木の葉に雨が降りかゝるや
 うな音がする。そのころになると、二万匹の蠶
 をかふのに、人一人附きゝりて、眠るひまもな
 い程いそがしい。

蠶が桑の葉を食ふのは、およそ二十五日から
 四十日の間で、その間に一日か二日づつ眠る
 ことが四度ある。眠る度に皮をぬぎかへて、し
 まひにはからだがすきとほつて見える。

包

破

この時木の枝やわらなどで作つたまぶしうつしてやると口から美しい絲を出してからだを包む。それが二三日の内に出来上つて繭になる。蠶の口の中には小さいくだが一つある。そのくたから出すねばつたしるが外へ出るとすぐにかわいて絲になるのである。繭の中の蠶はさなぎとなる。蠶が繭を作つてから二十日あまりたつとさなぎが蝶のやうな形になつて繭を破つて出て来る。これを蠶

産

蠶卵紙

の蛾といふ。蛾が出ると絲が取れないからまだ出ない内にむしてさなぎをころしておいて、それから繭をにて絲を取るのである。蛾は繭から出ると、やがて卵を産んで、間もなく死んでしまふから、出て来るとすぐに紙の上において卵を産みつけさせる。その卵を産みつけさせた紙を蠶卵紙といふ。一匹でおよそ四五百程の卵を産む。

蠶をかふのは春と夏と秋の三度で、春で夏で、秋でといふ名がある。わが國は昔から養蠶の盛な國で、生絲は外國へ賣出す品物の第一である。

第十 やき物とぬり物

茶わん・土びん・皿はちなど、はやき物にして、びん・わん・ぼん・重箱などはぬり物なり。
やき物をつくるには、土又は石のこをぬりかためてかわかし、かまどに入れて焼く。かくし

て出来たるものをすやきといふ。我らのつねに用ふる茶わん・皿はちの類はこのすやきにうはぐすりをかけてふたゝび焼きたるものなり。花鳥・山水・人物などのもやうはうはぐすりをかくる前にゑがく。

塗物はくりたる木又は組合せたる木竹又紙などにうるしを塗りてつくる。塗物に黄赤黒青などさまじうの色あるは、皆うるしに色を着けたるなり。うるしの上に金又は銀にてゑ

片 坐

カクルコトイヨ／＼盛ナリ。中ニ毛福井丸ノ
ボートニハ敵ノ砲丸雨ノ如クニ降リソ、ゲ
リ。ボートハ水ニオツル砲丸ノシヅキニ包マ
レタリ。中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲ
ウシナヒタルヲナゲキキタリ。一發ノ砲丸ハ
タチマチ中佐ノ身ヲ拂ヘリ。中佐ハ一片ノ肉
ヲボートニ殘シテ、海ノ中ニハウムラレタリ。

終

著作權所有

發行者 兼

文 部

省

發行者 刻

日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門町十七番地

代表者 大橋 新太郎

愛 敬 利 世
東京市小石川區愛敬町百〇八番地

印刷所

東京市小石川區愛敬町百〇八番地

博文館印刷所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

株式會社 國定教科書共同販賣所

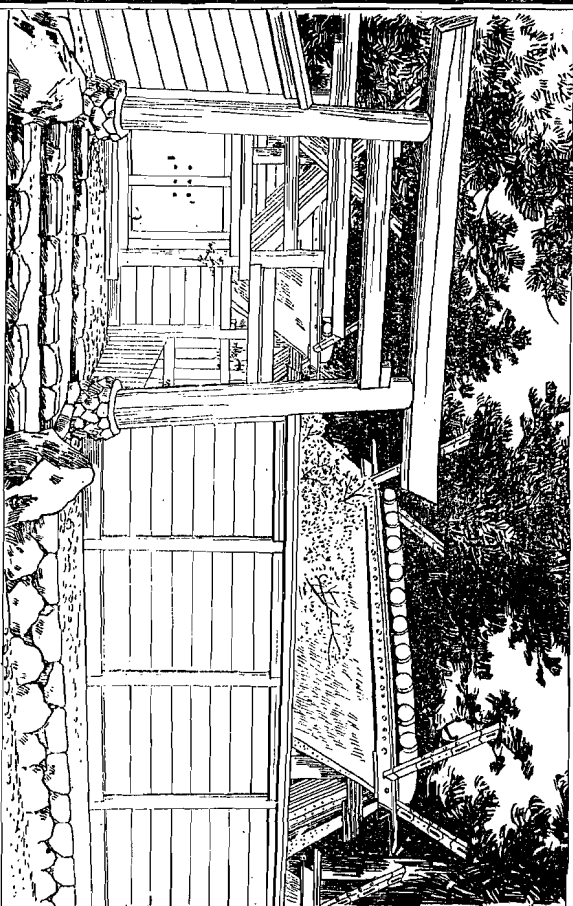
明治四十二年十月十日
文部省檢査濟

(一七五二)

明治四十二年十二月五日 翻刻印刷
明治四十二年十二月廿一日 翻刻發行

定價金八錢五厘

尋常小學讀本卷七



代々の天皇は皇大神宮
をたふとびたまふこと
きはめてあつく國民も
また深くうやまひ奉り
て、一生に一度はかなら
ず伊勢に参拜せんと心
がけざるものなし。諸子
は皇大神宮のかくばか

第一 皇大神宮

むろろ

巻八

第一	皇大神宮	一
第二	参宮日記の一節	三
第三	たけがり	八
第四	寫眞をおくる手紙	九
第五	働クコトハ人ノ本分	十三
第六	松下禪尼	十六
第七	白雀 (一)	十八
第八	白雀 (二)	二十二
第九	フザクズ	二十七
第十	かぢ屋	三十一
第十一	花ごよみ	三十四
第十二	マツチ	三八
第十三	火事	四十一
第十四	電報	四十五
第十五	藤原鎌足	四十九
第十六	鳥	五十四
第十七	近江八景	五十九
第十八	朱綿着物ノ由来	六十二
第十九	手紙	六十六
第二十	胃と身體	六十九
第二十一	虎ノ猫	七十二
第二十二	世界の話 (一)	七十五
第二十三	世界の話 (二)	八十
第二十四	橋中佐 (一)	八十三
第二十五	橋中佐 (二)	八十六
第二十六	名古屋	九十三

明治三十四年六月六日
文部省檢査濟

著作權所有

明治四十三年五月廿八日 翻刻印刷
明治四十三年六月十五日 翻刻發行

尋常小學讀本卷八
定價金八錢五厘

發行者 兼
發行所

代表者 大橋新太郎
日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門町十七番地

印刷者
印刷所

東京市小石川區又堅町百。八番地
敬利世
博文館印刷所
東京市小石川區又堅町百。八番地

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

終

尋常小學讀本卷九

第一課

草薙劍

(一)

代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には、必ず三種の神器を受けつぎ給ふ。草薙劍は即ち其の一なり。此の劍初は天叢雲劍と申し、後に改めて草薙劍と申すこととなれり。いでや此の劍の由來をかたらん。
神代の昔、天照大神の御弟素戔鳴尊出雲の國にいたり給ひしに、簸川のほとりにて夫婦の老人一人

第十四課	駱駝乘	四十四
第十三課	旅行先の父に送る手紙	四十二
第十二課	箱根山	三八
第十一課	昔の旅	三五
第十課	汽船汽車の發明	三十
第九課	靖國神社	二七
第八課	我が陸軍	二四
第七課	水兵の母	十八
第六課	利根川	十四
第五課	註文狀	十二
第四課	舞へや歌へや	十
第三課	花ノサナド	六
第二課	草薙劍 (一)	四
第一課	草薙劍 (二)	一

第十五課	かぶりもの	四十九
第十六課	動物ノ體色	五十三
第十七課	養生	五十七
第十八課	坂上田村麻呂	六十二
第十九課	空氣	六十四
第二十課	雨と風	六十六
第二十一課	水害見舞の文	七十
第二十二課	貯金	七十五
第二十三課	菅原道真	七十八
第二十四課	鹿馬	八十一
第二十五課	貨幣	八十七
第二十六課	三才女	九十一
第二十七課	日光山	九十三

賜へり。此の湖の落口は華嚴瀧となる。直下四十丈、壯觀名狀すべからず。此の水即ち大谷川の上流を成せり。
我が國到るところ名勝の地にとほしからざれども、よく人工の美と天然の美とを併せたるは日光に如くはなし。されば一年中遊覽者跡を絶たず、夏の盛りの頃、秋の紅葉の折には來り遊ぶもの最も多し。外國人の我が國に來る者亦必ずこゝに遊び、日光の結構を賞せざるものなし。

尋常小學讀本卷九終

大正二年七月十五日 翻刻印刷
大正二年七月三十一日 翻刻發行

著作權所有

著者 兼 發行 者 日本書籍株式會社
代表者 大橋新太郎
印刷者 敬利世
印刷所 博文館印刷所
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

大正二年七月三十一日
濟查檢省部文

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

定價金九錢

尋常小學讀本卷九

昭和四年三月廿六日購入
松本市城西
百瀬元海
學校

第一課 日本一の物
日本一の高山は臺灣の新高山なり。其の高さは一萬三千七十餘尺にして、富士山より高きこと凡そ一千尺なり。昔より富士は日本一の高山と稱せられしが明治二十七八年戦役の後臺灣の我が領土となりしより富士は第二位に落ちたり。然れども四時雪をいたゞきて潔く其の形白扇を倒にかけたるが如く美しきは、なほ我が國第一の山といふ

尋常小學讀本卷十

第十

録

目

第一課	日本一の物	一
第二課	葉	四
第三課	保安林	八
第四課	家	十一
第五課	紫式部と清少納言	十五
第六課	本	十七
第七課	張良と韓信	二十二
第八課	入營する友におくる	二十六
第九課	冬景色	二十七
第十課	甘藷	三十
第十一課	たしかを保證	三十四
第十二課	水師營の會見	三八
第十三課	花魁	四十一
第十四課	模様と色	四十四
第十五課	齊藤實盛	五十
第十六課	兵營内の生活	五十五
第十七課	足尾銅山	六十
第十八課	捕鯨船	六十三
第十九課	勇ましき少女	六十八
第二十課	温泉	七十二
第二十一課	人ノ身體	七十五
第二十二課	あいの風俗	七十九
第二十三課	家畜	八十三
第二十四課	松の下露	八十八
第二十五課	講話會の案内文	九十八
第二十六課	大和巡り	九十三
第二十七課	大和巡り	九十八

ずどんと一發。何を撃つたのだらう。銀杏の木。の鳥は急いで山の方へ逃げて行く。榛の木の雀は一度にはつと飛立つた。

第十課 甘藷

甘藷ノ名ハ地方ニヨリテ異ナリ。關東ニテハ薩芋トイヒ、薩摩ニテハ琉球芋トイヒ、琉球ニテハ唐芋トイフ。名稱ノカク異ナルヲ以テモ、此ノ芋ノ次第ニ西方ヨリ傳來セシコトヲ知ルベシ。原産地ハアメリカニシテ、アメリカヨリルソソニ傳ハリ、ルソソヨリ支那ニ入りシガ支那ヨリ琉球琉球ヨリ

薩摩ニ傳ハリ、遂ニ全國ニヒロガリシナリ。此ノ芋ノ始メテ琉球ニ傳ハリシハ、今ヨリ三百年以前ニシテ、内地へノ渡來ハ其ノ後百餘年ノコトナリ。然ルニ今日ノ如ク全國到ル處ニ作ラル、ニ至リシハ、主トシテ井戸平左衛門ト青木昆陽トノ盡力ニヨル。二人ガ之ヲヒロメントセシハ、不作ノ年餓死スル人ノ多キヲアハレミ、之ヲ救ハントスル義心ヨリ起レリ。

平左衛門ハ石見ノ國ノ役人ニ、六百七十餘年程前ノ人ナリ。日頃穀類ノ外ニ民ノ常食ニスベキモノ

ノ人ナリ。當時ハ遠島ト稱シテ、罪人ヲ遠キ島ニ流スコトアリシガ、是等ノ島ニハ作物ノ出來ザル荒地多ケレバ、罪人トモハ魚類果實等ニテ命ヲツナグノミニテ、餓死スルモノ年々少カラザリキ。昆陽ハ之ヲ救フニハ、此ノ芋ヲ植ウルニ如クハナシト思ヒ、或年試ミニ之ヲ作りシニ、其ノ結果甚ダ良カリキ。ヨリテクハシク其ノ作方、貯藏ノ方法等ヲ記シテ幕府ニ奉レリ。幕府ハ此ノ書物ニ種芋ヲ添ヘテ、島々ヲ始メ、内地ノ所々ヘ配布セシカバ、間モナク全國ニ作ラル、ニ至レリ。

フト心ガケシガ、或時旅僧ヨリ此ノ芋ノ話ヲ聞キテ、大イニ喜ビ、直チニ種芋ヲ薩摩ヨリ取寄セテ、之ヲ試植セシニ、其ノ出來非常ニ良カリシヲ以テ、數年ナラズシテ石見一國ニヒロガリ、是ヨリ後ハ五穀不作ノ年ニモ、國中一人ノ餓死スルモノナキニ至レリ。隣國ノ人モ聞傳ヘテ之ヲ植エ、遂ニハ中國地方全體ニ及ブニ至リトイフ。サレバ平左衛門ノ死セシ時ハ、中國ノ人々、知ルモ知ラヌモ父母ニ別ル、如ク悲シミタリトナリ。

昆陽ハ有名ナル學者ニテ、平左衛門ヨリハ少シ後

「あれが此の室にはいる前、先づ着物のほこりを拂ひ、はいつてからは静かに後の戸をしめた。きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。談話最中一人の老人がはいつて來ましたが、すぐに立つて椅子をゆづりました。人に親切なことは是でも知れると思ひました。あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風がなく、何を聞いても一々明白に答へて、しかもよけいなことはいひません。はきくしてゐて、禮儀作法をわきまへてゐることゝも、それですつか

昆陽ハ七十二歳ニテ死セリ。東京ノ西南、目黒ナル墓石ノ面ニ甘諸先生墓トアリ。

第十一課 たしかな保證

外國の或商會で新聞紙に店買入用の廣告を出した。志望者は五十人ばかりも來たが、主人は其の中で一人の青年をやとひ入れることにきめた。

或人が主人に向つて、知名の人の手紙を持つて來た者も大勢あつたのに、どういふ御見込であの青年を御用ひになつたのかとたづねた。

主人は答へて、

大正四年三月廿一日 修正印刷
大正四年三月廿四日 修正發行
大正四年三月廿七日 翻刻印刷
大正四年四月十日 翻刻發行

著作權所有

大正四年三月二十九日
文部省檢査濟

著者 兼發行 文部省

發行者 日本書籍株式會社
東京市日本橋區新右衛門町十番地

代表者 大橋新太郎

印刷者 東京市小石川區大塚町一丁目八番地
愛敬利世

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區大塚町一丁目八番地

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

重文閣智學堂發行

定價金九錢

尋常小學讀本卷十

尋常小學讀本卷十一

第一課 吉野山

吉野山霞の奥は知らねども、

見ゆる限りは櫻なりけむ。

全山花の雲に包まれたる吉野山の光景まのあたり見るが如し。

六田の渡を渡りて上り行く坂路の左右すべに櫻多し。行く吉野宮に参拜し、村上義光よしみつの墓をとらふ。眺望いよく開けて、満目總べて花なり。

卷11

目録

第一課	吉野山	一
第二課	蜜蜂	五
第三課	分業	九
第四課	兒島高德	十三
第五課	瀬戸内海	十七
第六課	我は海の子	二十
第七課	車と船	二十四
第八課	我方海軍	二十九
第九課	臺灣より樺太へ	三十五
第十課	熊王丸	四十一
第十一課	アヒヤ馬	四十六
第十二課	笑	五十一
第十三課	少年歌手	五十四
第十四課	出征兵士	五十九
第十五課	招待狀	六十一
第十六課	料理	六十四
第十七課	時間	六十七
第十八課	畫工の苦心	七十二
第十九課	瀑布	七十五
第二十課	鵜飼	七十八
第二十一課	紡績	八十三
第二十二課	蟲の農工業	八十七
第二十三課	物の價	九十
第二十四課	樺太より臺灣へ	九十五
第二十五課	諸葛孔明	百二
第二十六課	朝鮮の風俗	百六
第二十七課	平和なる村	百十一
第二十八課	同胞すべて六千萬	百十五

物なり。鰻うなぎをくはへてくちばしに巻附かれ、持て餘して見ゆるものをかし。かゞり火をたくは魚を集めんが爲なるのみならず、又鵜をばけます一法たり。魚は火の光を追ひて集り來り、水底にうつる鵜の影に恐れて、水面近く浮ぶが故に、鵜は深く沈まずして、たやすく魚を捕ふることを得るなり。

鵜はくゞり入る毎に獲物なくして浮び出づること少ければ、漁夫は一時間餘にして數千百尾の鰻を得るを常とす。數隻の漁舟相並び、波にくたくるかゞり火の下に、百にも近き鵜、此方に浮び、彼方に沈み、彼處にかくれ、

第二十二課 紡績

此處にあらはれ之を取圍みて、數十隻の遊船、岐阜提灯おきふちあんの光を水にうつせる奇觀は、筆も言葉も盡し難し。鵜うはを引上げて、鵜うのふなばたに立並べる時、半月金華山きんかざんの上にでて、川風たもとを拂ふも快し。

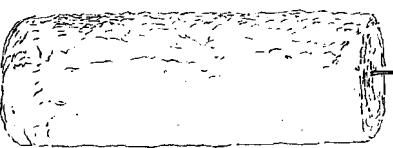
我が國ノ機械工業中最モ盛ナルハ紡績事業ニシテ、殊ニ綿花紡績其ノ大部ヲ占ム。年々一億圓ノ綿花ヲ輸入シテ、綿絲又ハ綿布トシ、内國ノ所用ヲミタシテ、尚海外ニ輸出スルモノ五千萬圓以上ニ及ブ。

紡績工場ニ入りテ見ヨ。蒸氣機關ノカニヨリテ自動ス

ル機械ハ、幾臺トナク立並ビテ廻轉スベク、其ノ作業ノ速ニシテ整然タルニハ、何人モ驚クナルベシ。

先ヅ綿花ヲ俵ヨリ出シテホグシ、土砂其ノ他ノ雜物ヲ去リ、鐵棒ニマキテ、長サ四尺、直径尺餘ノ筵綿トス。之ヲ紡績作業ノ第一段トス。皆機械ニヨリテナサル。其ノ作業ノ間ニハ綿花ノ細片四方ニ飛散シテ吹雪ノ風ニクルフガ如ク、機械ノ前ニ立テバ全身忽チ白シ。

既ニ筵綿トナレバ梳綿機ニ



筵綿

カク。コレニハ細小ノ針金ニテ作リタルフラスジノ仕掛ア

リテ、筵綿ヲ引延シナガラ細カキ雜物ヲ去ル。アタカモ人ノ頭髮ヲクシケヅルニ似タリ。

梳綿機ヨリ出ヅル綿花ハ眞白雪ノ如ク、四尺程ノ幅トナリテ進ム様精巧ナルレースノ流ヲ見ルガ如シ。此ノ流ハ自ラ集メラレテ、親指大ノ篠形トナリテ鐵管ノ中

ニ入ル。

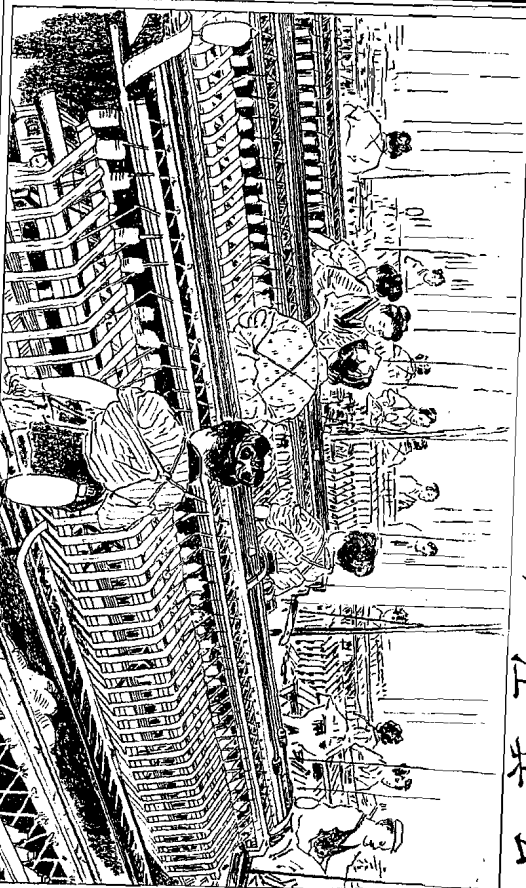
既ニ鐵管ニ滿ソレバ、コレヲ練篠機ト稱スル機械ニカケテ、或ハ合シ、或ハ延シ、又更ニ他ノ機械ニ移シ、イヨイヨ延シテ、イヨ／＼細クシ次第ニヨリテカケテ絲ノ形ニ近ヅカシム。サテ最後ニ精紡機ニ移シテ、適當ノ太サ

蠶の絲を吐きて繭まゆを造るは紡績の業に等しく、葉卷蟲の絲にて葉をつゞり合するは裁縫の業に同じ。蜜蜂の蜜を吐き、又たくみに巢すを造るは釀造の業と建築の業とをかねたりといはんか。

第二十二課 蟲の農工業

僅カニ六七人ノエ女ニテ、能ク二千本ノツムヲ扱フコトヲ得ベシ。加フルニ彼ノ蠟燭ノ心トスル太キ絲、蜘蛛ノイノ如キ細キ絲、細大意ノマニシテ、手紡ノ如ク不揃トナルコトナシ。機械ノカハ驚クベキモノニアラズヤ。

トナシテ、更ニヨリカケ、ツムニアキトラシム。エ女ハ常ニ其ノ前ニ立ち、絶エズ絲ニ目ヲ注ギテ、切ルレバ直チニ之ヲツナグ。熟練ト機敏トヲ要スルコト大ナリ。上手ナル者ハ一分時ニヨク十數本ノ絲ヲツナグトイフ。昔ノ絲車ニテ紡グ時ハ一本ノツムニ一人ヲ要スベキニ、今ハ



詔

残

尋常小學讀本卷十一終

東方文明先進の

上下心残一にして、

(七)

修身の徳是なりと

戦後經營かくこそと、

大みことのりたふとびて、同胞すべて六千萬。

任勞は重き日本國。同胞すべて六千萬。

教育勅語のり給ひ、

戊申ぼしんの詔書かしこしや。

大正三年九月五日
文部省檢査
日五十月九年三正大

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十二番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地
日本書籍株式會社工場

代表者

大倉保五郎

翻刻發行
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地 10
日本書籍株式會社

發行者兼
著作者

文部省

著作權所有

大正三年九月五日 修正印刷
大正三年九月八日 修正發行
大正三年九月十日 翻刻印刷
大正三年十月十五日 翻刻發行

尋常小學讀本卷十一
定價金九錢
臨時定價金拾五錢

尋常小學讀本卷十二

第一課 明治天皇の御製

教育勅語と戊申詔書とは我等が身を修め、世に處するの道を示させ給へるものにして、之を拜讀するもの誰か御聖徳の山よりも高く、御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。萬機の政をみえなはせし御かたはら折にふれてよみ出でさせ給ひし御製にも、常に國家を思ひ、臣民をあはれませ給ふ大御心の拜察せらるゝは、かしこしとあかしこき極みなり。いで、其の二三を申さ

目錄

第十四課	貿易	五十一	第十五課	南滿洲鐵道	五十四
第十三課	國產の歌	四十七	第十六課	歐羅巴の三大都	五十九
第十二課	我が國の農業	四十三	第十七課	獸類の移住	六十五
第十一課	阿蘇山	三十九	第十八課	音樂	七十
第十課	公事と私事	三十七	第十九課	コロンブス	七十三
第九課	學校落成式	三十四	第二十課	動物と植物の關係	八十
第八課	日本の女子	三十	第二十一課	鐵倉	八十三
第七課	鳥居勝商	二十六	第二十二課	辻音樂	八十一
第六課	鎌倉	二十三	第二十三課	烈士喜劍	八十五
第五課	動物と植物の關係	二十	第二十四課	大國民の品格	九十七
第四課	天氣豫報及び暴風雨警報	十六	第二十五課	自治の精神	百二
第三課	造船ノ話	十一	第二十六課	帝國議會	百五
第二課	日本海海戰	四	第二十七課	軍人に賜はりたる勅諭	百九
第一課	明治天皇の御製	一	第二十八課	國民の至情	百十七

の西南方に在りて、直徑八百メートルの噴火口を有し、其の北なる杵島岳も亦頂上に三箇の噴火口を有す。阿蘇山は此の如く複雑なる一大火山にして、山中に多くの噴火口及び温泉あり。火山全體の占むる面積は百十三平方里にして、東西十二里九町、南北十一里半に達せり。火山の破裂は地中の水蒸氣、地皮の弱き處を破りて、ほどばしり出づるより起る。其の破裂するや、土地はふるひ、岩の細片は火山灰となりて飛散し、又之に次ぎて眞紅の熔岩噴出することあり。熔岩の光、火山灰及び水蒸

氣にうつりて、見るもすさまじき光景を呈す。今より百三十餘年前、安永八年、櫻島の破裂せし時は、九州・四國・山陽・山陰・東海道までも火山灰を降らしたりといふ。

第十二課 我が國の農業

太古人口少く、人智も開けざりし時は、魚鳥を捕へ、果實を採りて食物とせり。人口やうやく増加し、自然に生ずる物のみにては不足を告ぐるに至りて、動物を飼養し、又植物を栽培して、衣食住の材料を得ることを工夫するに至れり。是即ち農業の起原なり。

我が國は氣候温に、地味肥え、極めて耕種に適し、米、麥の

栽培は最も早く開けたり。古來瑞穂スグホの國の名ある所以なり。

除
現今我が國の耕作地は臺灣及び樺太からふとを除きて凡そ五百五十萬町歩あり。作物は米麥其の大部分を占めて、米の作付反別は凡そ二百九十萬町歩、其の收穫は年々凡そ四千六七百萬石にして、麥の作付反別は凡そ百八十八萬町歩、其の收穫は年々凡そ二千萬石なり。我が國の米は品質優良にして其の味最も美なり。

養蠶も亦早くより開けて、今尚益盛なり。繭まゆの取入高は年々増加して近年三百五十萬石を越え、生絲は輸出品

昭和十二

昭和十二

の首位を占めて、其の價額一億圓以上に及ぶ。茶も亦盛に栽培せられ、輸出價額年々一千萬圓に達す。

我が國の農業中最も開けざるは牧畜ボウキョウの業なり。是我が國の氣候風土の牧畜に適せざるにあらず、四面皆海にして、魚介イサナの供給キョウキョウゆたかに、鳥獸の肉を食すること少く、又衣服の原料も綿麻生絲に仰あやぎて、家畜の毛に求むること少かりしによる。

我が國の農業は、決して現狀を以て満足すべきにあらず。耕地コウチの面積廣大なるが如ごとくなれども、總面積の約一割五分に過ぎず。西洋諸國の耕地が其の總面積の二割

より六割に及べるに比すれば、尚甚だ狭小なりといふべく、大いに荒地を開き、美田を増すの必要あり栽培法の如きも、舊法になづまず、能く學理を應用せば、一層其の收穫を増加することを得ん。家畜の飼養に至りては、更に之を盛にし、善良なる耕作用の牛馬、強健なる軍用の馬匹、滋養に富める乳肉等を供給せんこと、實に今日の急務なり。

世には農業を以ていやしき職業の如く思ふものなきにあらず。是大なる誤解なり。農業は我等が生活に必要なる材料を作り出す所以にして、國家一日もこれな

るべからず。農業に従事するものは多く野外にありて、清潔なる空氣を呼吸し、筋肉を勞するが故に、身體常に健全なり。農は人の職業中最も健全、最も高貴にして、又最も有益なるものなり。といへるフシントンの言味はふべし。

第十三課 國產の歌

我が大日本帝國の
沖繩諸島合せてぞ
北海道の一廳と、
朝鮮新にかりて、
古き六十八國より
府は三つ、縣は四十三。
外に南北新領土。
天産多きうまし國。

大正二年四月八日 翻刻印刷
大正二年四月廿一日 翻刻發行

定價金十錢

尋常小學讀本卷十二

著作權所有

大清二年四月十日
文部省檢査濟

發行所
東京市日本橋區新富町十七番地⁴

文部省

發行者兼
印刷者

株式會社
書籍式會社

代表者大橋新太郎
愛敬利世
東京市小石川區金町百八番地

印刷者
愛敬利世
東京市小石川區金町百八番地

印刷所
博文館印刷所
東京市小石川區金町百八番地

發賣所
株式會社
國定教科書共同販賣所
東京市日本橋區新名衛門町十六番地

發賣所

國定教科書共同販賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

印 刷 所

東京市小石川區久堅町百〇番地
博文館印刷所

印 刷 者

東京市小石川區鷺町百。八番地
愛敬利世

代表者 大橋新太郎

東京市日本橋區新吾衛町十七番地 4
日本書籍株式會社

文部省

金	修	讀	讀	讀	讀	讀
木	讀	讀	讀	讀	讀	讀
水	讀	讀	讀	讀	讀	讀
火	讀	讀	讀	讀	讀	讀
土	讀	讀	讀	讀	讀	讀
金	讀	讀	讀	讀	讀	讀

王國維

AW
HSD

2000

14

德川家

37-1-44-#

柳學金藏用

15-5-55

5